

指導目標を見直したことで、 こんな成果や気づきがありました



年度始めの目標設定は、難しいですね。でも、日々の授業でのイチロウ君の様子や達成状況を振り返ることで、次に何を指導すべきかが見えてきますよ。

授業を進めながら、学期始めに設定した指導目標を修正することが必要と感じました。
授業を進めていく中で、イチロウ君の実態を捉える観点が見えてきました。



本当にできるようになったのか、目標が達成できたのか、新たに設定すべき課題が考えられるかといった視点で、ジュン君の様子を細かく観察するようになりました。

数値目標ではなく、ジュン君の実態を踏まえた指導目標に基づき、日々の授業の中で彼の表情や行動を細かく観察することが、次の目標の仮説を立てることにもつながりますね。



フウタ君につけたい力を目指し、その成果を伝えることで、親御さんもフウタ君の成長をより実感できるでしょう。

目標となる行動ができるようになることがなぜ必要か、フウタ君のどのような力につながるか、次にどのような課題を設定するかが明確になりました。
目標を意識した言葉かけができるようになりました。



スモールステップで目標を見直したことで、指導の見通しがもてるようになりました。
ゲンキ君への関わり方を改善したことで、こんなことを試してみようという前向きな気持ちになりました。

スモールステップで取り組むことで、ゲンキ君の目標の達成状況が見えてきました。
目標が明確になることで、ゲンキ君への関わり方の改善点も見えてきましたね。



本リーフレットで取り上げた4つの実践を含む6事例と本研究の詳細は、研究成果報告書（平成30年9月頃刊行）に掲載します。
当研究所 Web サイト「報告書・資料」にアクセスのうえ、ご覧ください

<発行元>

独立行政法人 国立特別支援教育総合研究所

〒239-8585 神奈川県横須賀市野比5-1-1

TEL: 046-839-6803 FAX: 046-839-6918

<http://www.nise.go.jp/cms/>

<本研究についての問い合わせ先>

インクルーシブ教育システム推進センター 主任研究員 柳澤 亜希子（研究代表）

（平成30年3月発行）



独立行政法人国立特別支援教育総合研究所

平成28～29年度基幹研究（障害種別）

「特別支援学校（知的障害）に在籍する自閉症のある幼児児童生徒の実態の把握と指導に関する研究—目標のつながりを重視した指導の検討—」

自閉症のある子どもの指導目標の設定・見直しにおけるポイント —子どもの主体的な学びを引き出すために—

自閉症のある子どもの指導に携わっているみなさん。

「自閉症のある子どもは、その日の体調や気分により学習への取り組み方が違うから実態把握が難しい」、そのため、「年度始めは、大まかな目標になってしまう」、「変化が苦手だし、かんしゃくなどの行動があるから、指導の方針を変えるのに抵抗がある」などの悩みをおもちではありませんか？



ナイセ博士



指導目標を設定する時にこんなことを考えたり、 悩んだりしていませんか？

※登場する先生や子どもの名前は、すべて仮称です。



けい先生

イチロウ君の将来を考えると、お互いに意思疎通しやすい方法を身につけさせたいんだ。PECSの使用法は理解しているみたいだけど、何で使ってくれないんだ？

※ PECS（Picture Exchange Communication System）とは、絵カード交換式コミュニケーションシステムのことです。



あき先生

ジュンくんが、目標をもって作業に取り組めるようにするためには、指導目標を数値目標にした方が分かりやすいわよね。



たつや先生

ゲンキ君の他害行動は激しくて、対応が難しいんだ。パーソナルスペースから出て、自席に着席して学習できるようにしたいのだけど…うーん。



ゆい先生

フウタ君の親御さんに、何を指導しているか伝えやすくするためには、具体的な活動内容を目標にした方がいいわよね。

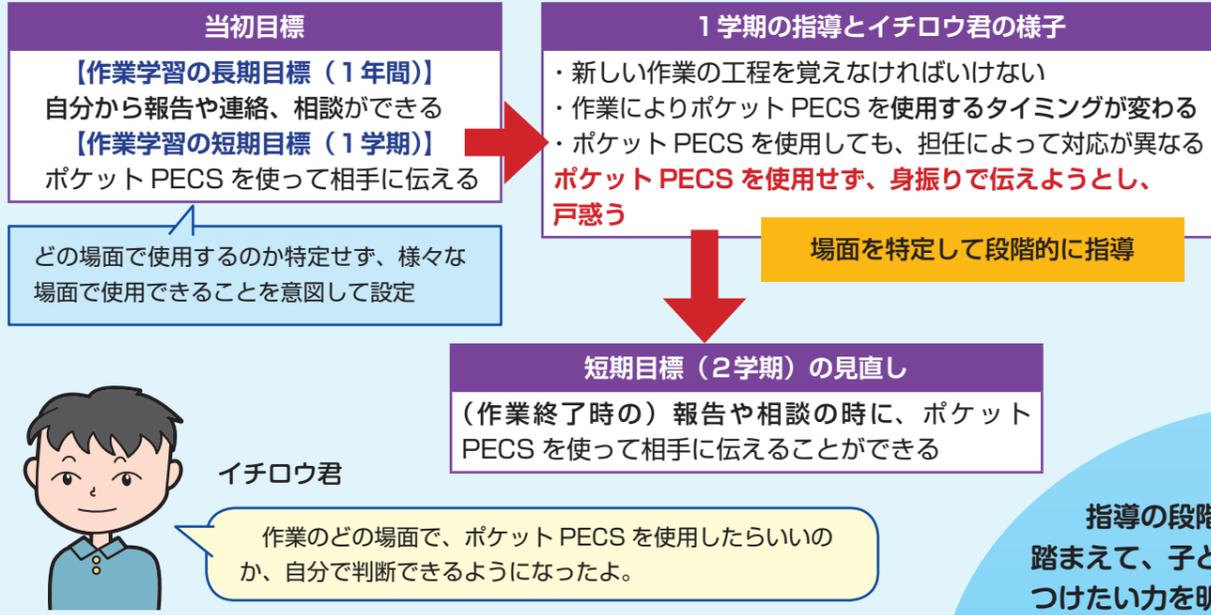
このリーフレットでは、4人の先生が、①どのように指導目標を見直し、その結果、②先生と担当している子ども達にどんな成果があったのかを紹介します。また、4つの実践から「**ここがポイントである!**」と考えたことをお伝えします。

4人の先生の実践が、同じ悩みをもっている先生方の指導の参考になることを願っています。

けい先生の事例

〈研究成果報告書第IV章 C校生徒Iの事例より〉

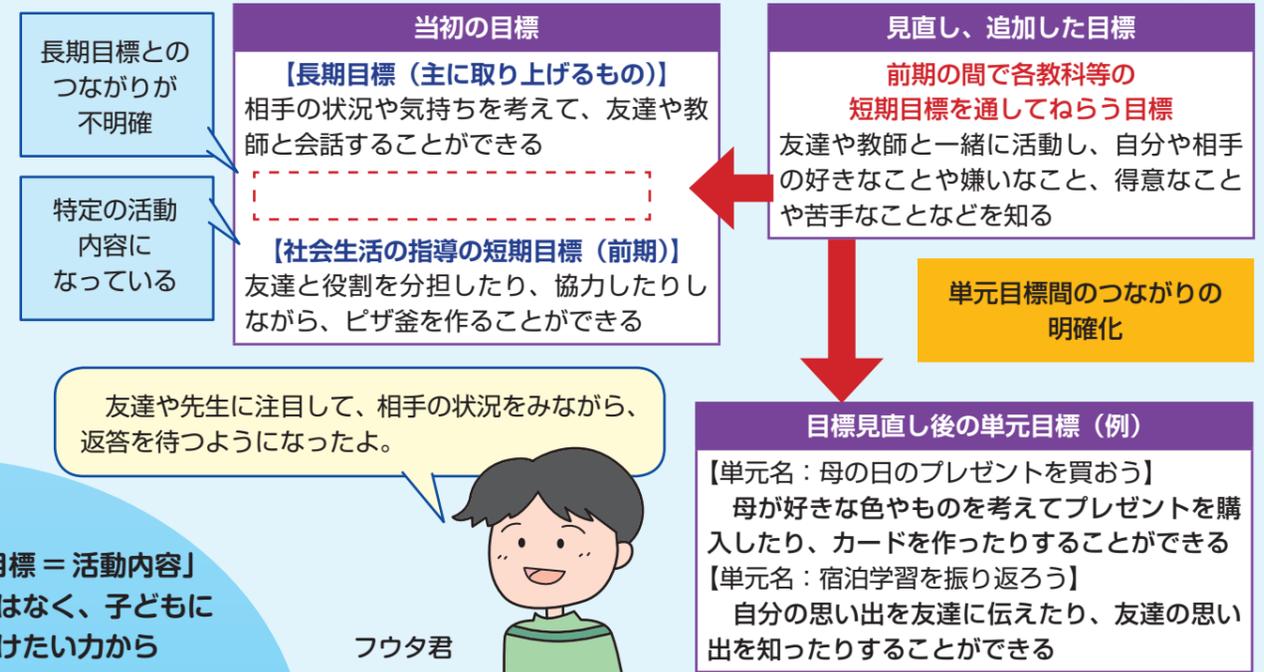
高等部のイチロウ君（重度の知的障害と自閉症）は発語に難しさがあります。けい先生は、イチロウ君が他者と意思疎通しやすいコミュニケーション手段として、携帯用の絵カード交換式コミュニケーションシステム（PECS）を使用しています。しかし、イチロウ君が自発的にそれを使用して、意思を伝えることは少ないです。



ゆい先生の事例

〈研究成果報告書第IV章 A校児童Fの事例より〉

小学部のフウタ君（中度の知的障害と自閉症）は、経験したことや気持ちを両親や担任に伝えることができますが、相手の状況を考慮せずに、一方的に話しかけることがあります。



指導目標の設定・見直しのポイント

指導の段階制を踏まえて、子どもにつけたい力を明確化

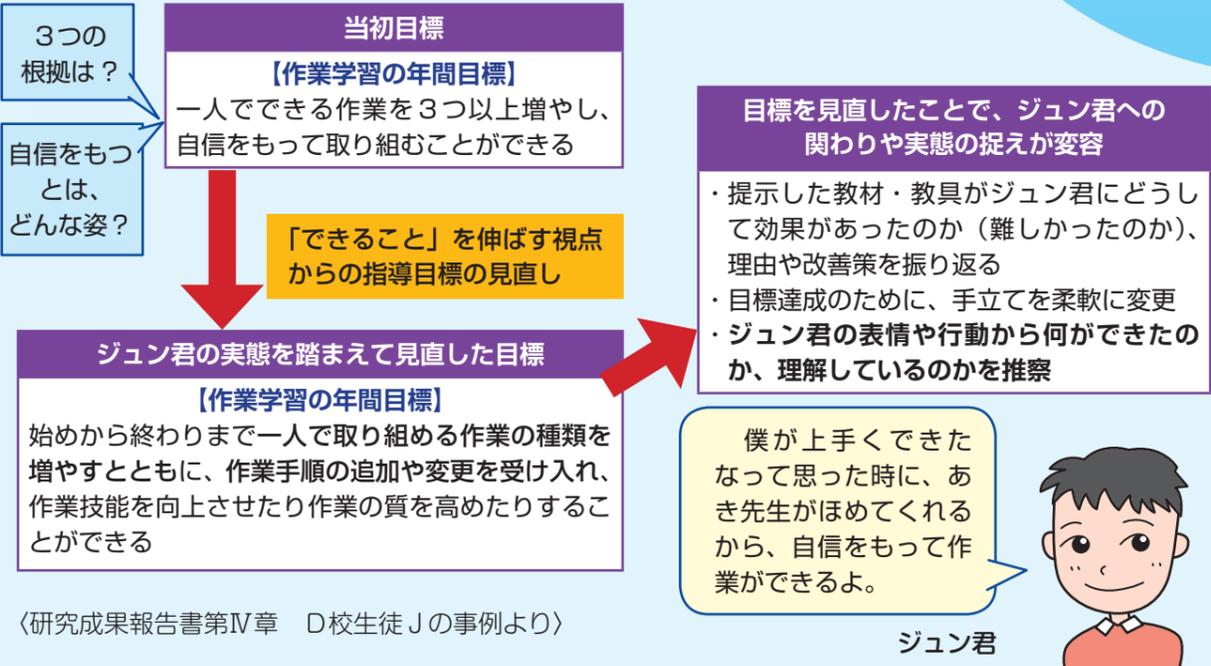
「目標＝活動内容」ではなく、子どもにつけたい力から目標を設定

できることを伸ばす視点で目標を設定

スモールステップによる目標達成

あき先生の事例

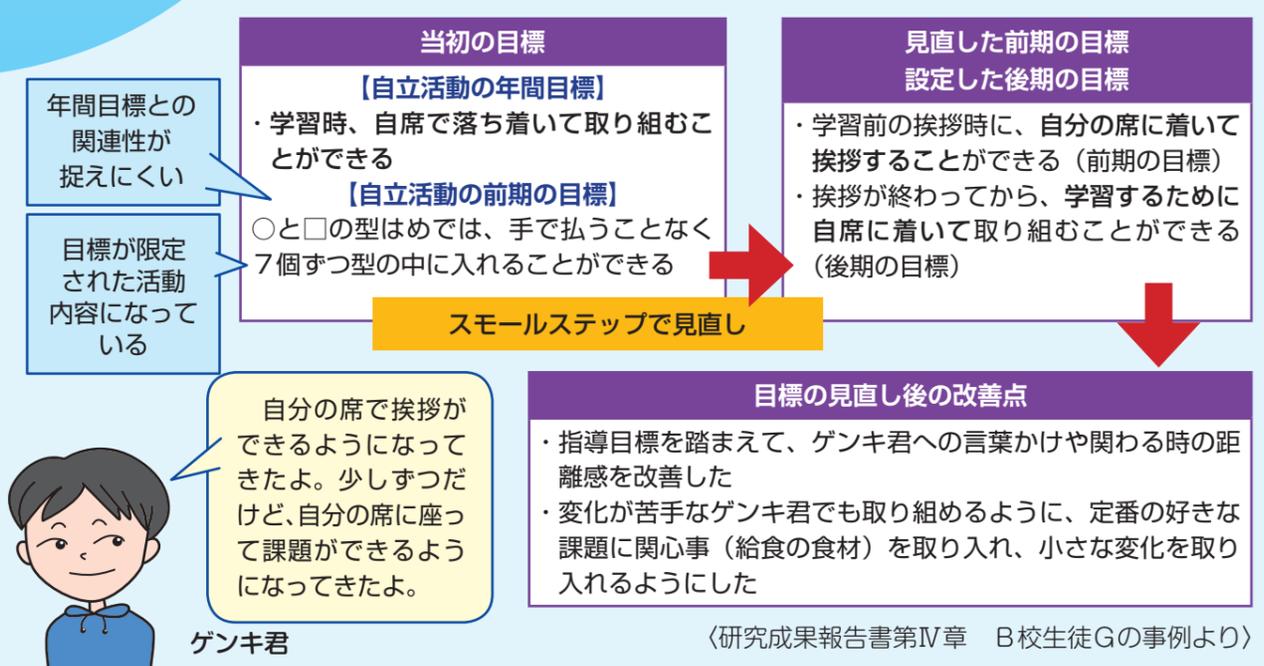
高等部のジュン君（重度の知的障害と自閉症）は、気持ちが不安定になると大きな声を出します。しかし、内容が明確で見通しがもてれば、集中して学習に取り組めます。また、カードで変更を提示すると、受け入れることができるようになってきました。



〈研究成果報告書第IV章 D校生徒Jの事例より〉

たつや先生の事例

中学部のゲンキ君（重度の知的障害と自閉症）は、他者を叩くなどの他害行動が極めて激しく、教室のパーソナルスペースで過ごすことが多く、自席に着席して学習を行うことが難しいです。



〈研究成果報告書第IV章 B校生徒Gの事例より〉